

売薬の意匠あれこれ 絵看板

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい たもつ)

かつて東京都西多摩郡青梅町と呼ばれた(現)青梅市には「昭和レトロ商品博物館」があります。この博物館は昭和時代の30~40年代を主としたレトロテーマパークで駄菓子、雑誌の付録、雑貨、文具、ポスターなど昭和のB級文化をあらゆる品々を展示しています。近隣には別館の「昭和幻燈館」があり当時の一番の娯楽であった映画を中心とした展示をしています。両館ともに目に付くのが当時の映画の絵看板(=看板絵)です。

絵看板とは、板に絵師がペンキなどで絵を描いたもので、劇場

や映画館の前に上演中の作品のシーンなどを描いて掲げたものです。青梅駅から両館へと続く旧青梅街道に沿った街並みには、昔の映画の絵看板も掲げられています。

絵看板の歴史は江戸の元禄年間の芝居小屋の絵看板から始まり、その歴史は300年以上に及びますが、その流れの延長として現在の歌舞伎座の正面玄関には芝居と役者の全体像が分かる絵看板が掲げられています。



①



②



③



④

①「一方水」

昭和の時代になると薬局関係の店舗にも絵師の描いた絵看板が掲げられました。この目薬の絵看板は、「一方水」の薬品名を中心とし、資生堂に関する邑田(資生堂)の印が描かれています。福原有信の始めた洋風調剤薬局の「資生堂薬局」を原点にする元祖(福原)資生堂には、明治中頃では資生堂に勤務した薬剤師たちがのれん分けをするように、三井資生堂=本町資生堂、室町資生堂など複数の資生堂があり、この邑田(資生堂)もその資生堂の一つです。

②「テリアカ」「萬病感應丸」「人参沈香丸」「強兵丸」

本舗(製造元)が藤原快明堂、特約(販売)店が葛岡薬舗の絵看板です。上記の4製品名が書かれていますが、江戸時代に始まった絵看板は近代になってさまざまな広告に使われることになります。

その一つが映画館の入り口に掲げられた絵看板で、次に多く見られたのは銭湯の浴室正面に描かれた銭湯(ペンキ)絵師による絵看板でした。その題材には雄大な自然を眺めているだけでも気分転換になる構図で描かれ、それは薬を求める消費者のメンタル面の一助となることと共通したものが、この図柄も伊豆辺りの観光地の海岸線を描いた図柄となっています。

③「血肉トーゼ」「ビニーセル」

西洋薬の広告の「富屋薬局」の絵看板です。「血肉トーゼ」は、現在は山之内製薬と合併してアステラス製薬となった藤沢薬品の主力製品「ブルトゼ」の類似商品と思われる。

銭湯の絵看板で人気の高いのは朝日、に照らされたり枯れることのない松、を取り入れた構図で、なかでも人気のあったのは「富士山」でした。貴重な銭湯絵を描く銭湯(ペンキ)絵師は現在全国に3人しかおりません。

④「ヒラミン」「アイロミン」

本舗(製造元)が松田博愛堂、(販売)店が伊藤薬舗の絵看板です。銭湯絵に描かれないものには「猿(去る)」「夕日(家業が沈む。景気が落ちる)」「紅葉(葉が落ちる。赤字)」を連想させることから描かれませんが、逆に上記のように人気の高いのは「富士山」で、そのなかでも「西伊豆」「三保の松原」「富士五湖」が描かれ、さわやかな青い空と海や湖、緑の深い松や朝日に映える雄大な富士山が描かれました。(ちなみに①は夕日ではなく朝日の昇る絵です。)